

学生の協同労働探究

2022年3月号(352号)では学生の協同労働観にフォーカスをあてて掲載した。本号では、その流れを継ぐとともに、「今年度の寄附講座の開催報告」と「協同労働や労働者協同組合をテーマに据えた卒業論文・修士論文」を掲載した。

本号の狙いは、学生にとっての協同労働の特徴・魅力・課題・疑問を共有した上で、若い人たちへの協同労働や労働者協同組合の周知のあり方(内容・方法)、共感するポイントを元にして、どのように学生とともに協同労働で学ぶ場づくり・職場づくり・地域づくりを通じて社会を変革するのかのヒントを探究することにある。そのときには、日本社会で起きているマクロな視点とともに、地域社会で起きるメゾな視点、一人ひとりが抱えているミクロな視点が入り混じりながら考察することが大切になるだろう。それらを検討する上での学生の声を多く掲載した。

卒業論文・修士論文では、4人の論文を要約して掲載した。4人の報告では、文献研究だけではなく、大学や自宅に近い労働者協同組合の現場に訪問し、インタビュー等のプロセスを経て作成している。

論文内容は、論文タイトルのように、鎌田は「地域コミュニティの再生」、齋藤は「利用者や地域に対する強み」、吉田は「話し合いの課題と労働者の在り方」、小川は「働きづらさを抱える人の就労継続を実現する要因」である。それらは共通して、利用者・働く組合員・地域住民の誰もが主人公性や主体性を持ってコミュニティをつくることが描かれていたように考えている。各論文では主人公性や主体性を持って社会をつくる上での多様な課題や視点が書かれている。そのことについて各論文のすべてのキーワードを紙幅の関係であげきれないが、小川報告では「寛容さの獲得」「各人に合った働き方の実現」、吉田報告では「出資」「意見反映」「よい仕事」、鎌田報告では「居場所」「働く場」「協働の関係」、齋藤報告では「ネットワーク」「信頼関係」「民主的運営」「職場包摂」等があると考えている。これらは労働者協同組合の原則にも関わることであり、協同労働による仕事おこし、職場づくり、地域づくりを推進する上で、大切にしている視点とも重なっている。

2022年の寄附講座報告では、学びの当事者である学生のコメントを重視し掲載した。

埼玉大学では、昨年度に引き続き、2回目の講座参加となった笠原愛理さんが執筆した。学生でありながらグループ討論のコーディネーターをし、埼玉県深谷市のセンター事業団

の現場に訪問した。それらの経験と、自分の生きてきた歴史も振り返りながら「『働くこと』の根本にあること」を探究した。本報告はワーカーズコープ寄附講座の8年間の歴史で、講座の学びから自主的に現場を訪問し、自分の生き方と照らして共に生きることの価値を深く探究した唯一のレポートだと考えている。

滋賀大学彦根キャンパスでは、初開催となった講座内容を掲載している。柴田報告で「改めて今、私は働くことは何なのかを考えている」「生きていくためにはコミュニティが必要なかもしれない」と述べており、講座に社会人の方も交じりながら、学生とともに学びを深めあったのが滋賀大学の講座の特徴だったと考えている。昨年春に開催準備にあたり柴田雅美さんから「352号(2022年3月号)の発見誌面白かった」と話され、多くのメーカーが引かれていたことに驚いたが、一つの成果として、滋賀大学彦根キャンパスで開催できたことは嬉しい。今後も協同労働を軸としたワーカーズコープの寄附講座を多くの大学で新規開催ができればと考えている。

新潟大学では、センター事業団の全国新人事務局員候補で社会人1年目の成田海知さんが執筆した。昨年学生であった視点と社会人の視点を持ちあわせながら、講座では全体司会をして、学生が学び合える場づくりや学生に伝える難しさ等を表現した報告である。この講義参加者の4年生が、センター事業団の全国新人事務局員候補として来月から働き出す予定である。これは8年間の寄附講座の歴史で初めての事例となる。またインターンシップや現場訪問を多くの人が参加したいと申し出があるなど、講座後の学びの継続性を担保するモデルに新潟大学の寄附講座は成りうると考えている。

2022年度の寄附講座の成果と展望を相良が執筆した。学生のコメントから、経済的・時間的に余裕が無くなる社会になるなかで、生きる上での根本テーマを問いあう場がないように感じた。しかし協同労働や労働者協同組合の理念や実践を伝え学生同士で交流するなかで、生きることに希望を見出す学生が出てくる。引き続き、寄附講座が学生との出会う場としての入口戦略から、学んだことをどう地域に生かすのかという出口戦略も実践していきたい。

駒澤大学のNPO論で、学生から「SNSでリア充な内容を発信すると炎上する。逆にアルバイト先がブラックであったり、どうしようもなくひどい状況を伝えたときにはバズリやすい共感も得られる。その意味で、今は自分が良かったことを発信することをためらうことがある」との発言があった。その発言を聞いて「(人や社会・未来に)いいことをしたい」と人前と言え、それに共感が集まる社会・地域をつくる意味でも、協同労働・よい仕事の文化を職場だけではなく、暮らしの場・学ぶ場など人間が生きるコミュニティで生かし、広めたい。その実験場として多様な背景を持った若い学生が集まる寄附講座は未来の社会をつくる意味で、大いなる可能性を秘めていると考えている。

相良 孝雄(協同総合研究所 事務局長)